
私立星鐘学園第三生徒会奮闘日記

eifos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立星鐘学園第三生徒会奮闘日記

【Nコード】

N4308S

【作者名】

eifos

【あらすじ】

生徒会戦、それは私立星鐘学園で行われる伝統的な行事のこと。三つの生徒会が次の年の行事執行権をめぐり、激しい攻防を繰り広げているというのに俺、麻木 秋哉の所属する第三生徒会は今日ものほほん、と過ごしていた。

しかしそんなある日、優秀な人材を集めた第一生徒会から挑戦状が突き付けられ俺たちは大パニック！そして今日も会長の鶴の一声で始まるしょーもない出来ごとの数々、そしてそれに振り回され

るメンバーたち。俺たちはまたのほほん、とした日々を取り戻すことができるのか！？

第零話 戦う生徒会（前書き）

ども！はじめまして、そしてお久しぶりです。震災やなんだかん
だで掲載が遅れました。
それではどうぞ！

第零話 戦う生徒会

第零話 戦う生徒会

*** ? ***

生徒会戦、それは私の通う私立星鐘学園^{せいしょう}で行われる伝統ある行事のことだ。4月の始業式から12月の二期の終業式までの8ヶ月間、それぞれの生徒会は双方で決めたルールに則り競技を行い、先生の立ち会いの元、勝利した生徒会には勝ち星が与えられる。そして二期の終業式までに一番多くの勝ち星を稼いだ生徒会に来年度の行事執行権、つまり学校の行事を執り行う権利を与えられるのだ。生徒会の数は三つ、今年度の執行権を得た実力主義の第一生徒会、頭脳派で民主主義の第二生徒会、そしてこれを書いている私が所属する第三生徒会。今までの記録を見る限り、第三生徒会は一度も執行権を獲得したことはないらしい。……さて、前書きはこの辺にしておいてそろそろ始めましょうか。これは共に掛け替えのない時を過ごした仲間たちと勝利を目指し、戦った一年間の記録であり、第三生徒会を勝利に導いた副会長の物語。

*** ? ***

星鐘学園中央校舎三階 第三生徒会室

生徒会戦開戦宣言から二週間。まだどの会も動きはなく、膠着状態といったカンジだ。俺、麻木 秋哉の所属する第三生徒会も例外に漏れず、目立った活動はなかった。月曜の憂鬱な授業を終え、第三生徒会のプレートが掲げられたドアをくぐると見慣れた二人が

出迎えてくれた。

「あ、麻木、早かったわね」

「シュウ、おつかれー」

「おう会長、由岐お疲れ」

窓際の執務机に座る美少女、彼女の名前は皇 沙夜香。我らが第三生徒会の会長にして俺たちのマススコットキャラクター！低身長で口リ体型なのに大人っぽいロングヘアーにしてちよつと背伸びしたカンジがまたたまないんだな！あ、因みに同級生だからね。

「会長」

「何よ？」

「好きです、付き合ってください」

「はいはいまた今度ね」

おお！これは脈アリか！？・・・・・・いや、この間もこうやってあしらわれた様な気がする。だがしかし俺は諦めない、会長が頷くまでは！！

「というかさシュウ、そのボケいい加減飽きたよ。ほかのネタ考えない？」

「バカ野郎、ボケじゃねえ。マジだマジ、本気と書いてマジと読むほうのマジだ」

「結局どのマジでも意味は同じでしょーが」

本を片手にソファーに座り、俺の一世一代（？）のカミングアウトをボケとカン違いする長い茶色がかったくせつ毛をうなじあたりで縛った少女、彼女は水上 由岐。小学校から一緒に正直なところんざりしてたりする。彼女の茶髪は染めたものじゃなくて地毛らしい。それに世間一般で言う美人の分類に入るらしく中学の時から男女問わずモテモテなただけど本人は興味ないみたい。

「あ、そんなことよりさ麻木、お茶入れてよ。今日はアンタに任せるからさ」

「はい、了解です！由岐、お前は？」

「ん、任せるわ」

手に持ったバッグをソファの脇に置いて、茶葉の並ぶガラス棚をあける。さて、今日はなににしようか？ダージリンは昨日飲んだしアッサムはちょうど切らしちゃってるし……。かといって緑茶ってカンジじゃないんだよな、今日は。うーん仕方ない、あんまり得意じゃないけど中国茶にしてみますか。手を伸ばし、棚の一番奥から花の絵柄がついた缶を取り出す。蓋を開けると中からジャスミンのいい香りが漂ってくる。茶葉を少し冷ました（といっても九十度くらいだけ）お湯と一緒に急須に入れてだいたい二分ほど待つ、それから湯呑みに注ぐと優しい花の香りが部屋中に広がる。うん、今日はなかなかうまくできたな。

「はい、ジャスミンティーの完成です」

「お、珍しいじゃない中国茶なんて」

「うーん、あと少し深みがほしいな。もうちょつと蒸らしてもよかつたんじゃない？」

「うつさい、中国茶は二ガテなんだ」

「ふふふ、次は期待してるわよ？」

みんなのぶんを配り終えて自分の湯呑みを持って由岐の向かい側に座る。ジャスミンティーに口を付けてみると由岐の指摘どおりもう少し深みが欲しい。やっぱり中国茶は練習しないと……。なんて和んでいると部屋のドアが勢いよく開かれ、一人の女子があらわてた様子で入ってくる。

「会長！大変です、今すぐきて下さい！！」

「ちょ、一体なによ？慌ただしい」

「とにかく大変なんですよー！」

「ほらざくろ、落ち着いて落ち着いて。何があったの？」

乱れた柔らかい長い黒髪をなおしながら、第三生徒会唯一の一年女子、高島 ざくろちゃんはとんでもないことを口にした。

「だ、第一生徒会から第二・第三生徒会に対して特例宣言書が発行されました！」

「あの、ざくろちゃん、その内容って……。？」

特例宣言書とは執行権を持っている生徒会にのみ与えられる権利の一つで特定の生徒組織、つまり部活や俺たち生徒会に対して一方的な命令が下せるという反則じみた権利のことだ。本来は規則違反などを改善させるために作られたんだけどそんな権利を連発されたらたまったモンじゃない。ということで年に3回までついている回数制限が設けられてるんだ。でもそれをこのタイミングで、しかも生徒会相手に発行してくるなんてつまり……………。

「第一生徒会からの宣戦布告です！」

はあ、今年の生徒会戦は初っぱなから荒れそうだ……………。

星鐘学園中央校舎一階 昇降口前掲示板

ざくろちゃんに連れられ、俺たち二年メンバーは急いで一階の掲示板へ向かった。掲示板のところへ着くとそこには小さな人だかりが出来ており、その一角に第三生徒会二人目の男子メンバー、鏡美司の姿があった。あっちも俺らが来たことに気づきこつちを向く「司くん、呼んできたよ」

「ありがとうね。先輩、もう高島から報告受けましたか？」

「ああ、第一生徒会から宣戦布告があつたんだってな」

「はい。ある意味宣戦布告ですね。まあともかく見てください」

人混みをかき分け、掲示板の見えるところまで移動する。ついこの間までは何も張られていなかったコルクボードにはA4サイズの紙が張ってあった。

「えーなになに、【特例宣言、第三生徒会は五月七日までに我々第一生徒会に対して必ず生徒会戦を行うこと、これに従わない場合、処罰の対象となる。】だって。サヤ、どうする？」

「ど、どうって、そりゃあ……………勝負しなくちゃ……………」

「やられましたね、先手を打たれた。これじゃあ勝負せざるを得ない、しかもあの第一生徒会相手に」

「でも麻木先輩、それって相手にとっても部の悪い賭ですよな？」

「そうだな、確かに部がいいとはいえない。でもよく考えてみる、今はもう四月の下旬。で、期限は四月中のみ。つまり緻密な作戦を練っている時間がないんだ、だから両生徒会とも作戦なしで戦うから各自の実力がはつきり出る戦いになる。そうなると能力重視でメンバーを集めた第一生徒会の方が有利といえるだろ？そんな奴ら相手に作戦なしで戦うのは無謀としかいえないな、まあとはいえ賭であることに代わりない。でも相手も勝算があるからこんなハイリスクハイリターンな作戦を打ち出してきたんだろうな」

くっそ、まさか奇襲なんて反則じみたことしやがって。流石は藤宮玲士郎、すごい決断力だ。伊達に第一生徒会の会長やってるわけじゃないみたいだな。

「え、ええ〜っと、あと二週間くらいしか時間ないよね？・・・・麻木、どうしょつか？」

「とりあえず生徒会室に戻りましょう。はやく作戦考えないとほんとにノープランで戦うことになっちゃいますよ」

「う、それだけは避けたいわね。はあ、何でこんなことになるんだか・・・・・・」

愚痴をいいたくなるのもわかりますけど、これが現実です。愚痴っても仕方ありません。・・・なんて思っているのだが正直俺だって愚痴のひとつやふたつ言いたいところだ。この宣言書は完全に予想外、寝耳に水とはまさにこういうことなんだろう。でもあっちだってハードスケジュールだ、なんていったって二週間に二回も生徒会戦をやるんだ。この条件を逆手に取ればいいんだけどな。

星鐘学園中央校舎 三階第一生徒会室

秋哉たちが悩んでいたそのころ、第一生徒会の副会長、青山 英太もまた悩んでいた。会長、藤宮 玲士郎の発案した奇襲作戦は見事に成功した。しかし裏を返せばこちらもある程度のリスクを負った

ことにもなる。本来であれば競技内容を決めて、二、三週間たつてから競技を行うというのが今回は異例中の異例、たった二週間の間に二回も戦うことになる。しかもまだ競技内容は決まっていらない、これじゃあ作戦の立てようがない。相手も同じ条件だからといってやはり不安だ。仕事を終え、部屋に戻ると、執務机に座りコーヒ―をすする玲士郎だけが彼を迎えてくれた。

「会長、特例宣言書張り終えました」

「む、ありがとう。本来であればほかの役員に頼むのだが、今日は人手が足りなくてね。君も飲むかい？」

結構です、とやんわりと断り、手に持っていたファイルと余った宣言書のコピーを棚に置く。それから長机の上に積まれていた書類の数々（主に来月の行事関係）と向き合う。それからしばしの間、沈黙が続いたが英太の一言がその沈黙を破った。

「あの会長、今回の作戦、大丈夫でしょうか？確かに電撃的な奇襲でしたけどこちらもしスクを負ったことになります」

「ああ、その点については問題ない。予想される競技の作戦はある程度用意してある」

「・・・・・・いつの間に」

「ははは、これくらいしておかなければこんな無茶苦茶な作戦、リスクが大きすぎるよ」

苦笑しながら副会長の英太も知らないことをサラっという玲士郎。まさか作戦を立ててあったなんて、どうして自分には教えてくれなかったのかを英太が聞いてみると。

「君を信用していないわけではないけど、極力情報が漏れないようにしたかったんだ。許してくれ」

「いえ、構いません。それより会長」

「ん？なんだい？」

「いい加減仕事しませんか？」

「・・・・・・あー、うんそうだね」

執務机の上には書類の山が三つほど鎮座していた。それでも粗方英

太が片づけてくれたのだがやはり量が量なのでまだ追いついていなかった。仕方なく玲士郎は書類の山に手を着ける。それを見届け、心のどこかにイヤな予感を抱えながら英太も作業へと戻る。そして翌日、英太の予感は的中する事になった……。

第零話 戦う生徒会（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。さてここで言
い訳をひとつふたつ。

最近いいアイディアが浮かばず気分転換のつもりで書いてみました。
『私と世界が始まった日』についてはもうしばらくお待ちください
（汗）そんな訳でこっちは基本後回しになってしまいますがどうか
見捨てないでください。
それではまた次回。

キャラクター紹介

第三生徒会

名前 麻木 秋哉

性別 男

年齢 17

学年 2年

・第三生徒会の副会長で二年唯一の男子メンバー。自他ともに認めるアニメヲタクだが頭脳明晰でテストの成績は常に10番以内に入っている。顔はなかなかなのだが本人は会長一筋でほかの女子は恋愛対象としては眼中にない。頭が良く切れ、第三生徒会の軍師的な存在で会長の為になるとものすごい力を発揮するため切れ者としてほかの生徒会から恐れられている、またボケ役・ツッコミ役を両方ともこなせる数少ない万能選手。

名前 皇 沙夜香

性別 女

年齢 17

学年 2年

・第三生徒会を引っ張る歴代最強(?)の会長。大胆な行動力と高いカリスマ性で一癖も二癖もある第三生徒会のメンバーをしっかりと統制している。隠れアニメヲタクで秋哉とよくマイナーなアニメコメントをやっている。成績はあまりよくない。秋哉は敬語を使っているがざくろ、司以外のメンバーとは同級生。

名前 水上 由岐

性別 女

年齢 16

学年 2年

・第三生徒会の会計担当。学年1位の学力を持っており、生徒会を支える作戦参謀のような存在。勉強だけではなく運動神経も抜群で特に柔術が得意。いつもやる気のなさそうな目をしているが実はちゃんと考えている。生徒会の中では主にツッコミ担当だがボケることもしばしば。因みに秋哉の幼なじみ。

名前 高島 ざくろ

性別 女

年齢 16

学年 1年

・第三生徒会の書記担当。柔らかい小動物の様な雰囲気第三生徒会のマスコットの存在。1年だが由岐とは旧知の仲らしくよくつるんでいる。

名前 鏡美 司

性別 男

年齢 15

学年 1年

・第三生徒会の会長補佐。お人よしなため面倒事をよく押し付けられてしまうちょっと不幸な少年。武術を学んでおり、合気道が得意で絡んできた不良を簡単にあしらったこともあるらしく、実力は確か。人脈が広く、それを会長に見込まれスカウトされる。第三生徒会唯一の常識人(?)で終始ツッコミに徹しているため思わぬとばっちりを食らうこともしばしば。弓道部に所属しており、生徒会に顔を出せない日がたまにある。女性のような名前と中性的な顔立ちで女子メンバーからよくからかわれる。

第一生徒会

名前 藤宮 玲士郎

性別 男

年齢 18

学年 3年

・第一生徒会を指揮する会長。見事な采配で学校の行事をきっちり仕切っていく。実力主義な思考が強く、自分より能力が低い判断すると見下してしまう悪い癖があるが物わかりはよい。頭はいいのだが客観的思考がニガテで熱くなりやすい。ボケ、ツツコミともにニガテ。由岐とは旧知の仲らしい。

名前 青山 英太

性別 男

年齢 17

学年 2年

・第一生徒会の副会長。縁の下の力持ち的な存在で情報収集から会計監査までを一人で仕切る優秀な人材で彼あつての第一生徒会といつても過言ではない。主にツツコミ担当。司と同じ弓道部に所属している。

年間行事予定表（第一生徒会作成）

四月 生徒会戦開戦宣言（四月一日）

五月 校内前期体育大会

六月 前期学校祭

七月 夏休み

八月 夏休み

九月 校内後期体育大会、修学旅行（二年）

十月 後期学校祭

十一月 合唱コンクール

十二月 生徒会戦終了宣言（十二月二十日）

第一話 天才と何とかは紙一重って言うけど実際は違々と最近気づいた（前書き

ども、お久しぶりです。 e i f o s です。

もう片方はもう少しで書きあがるのもう少々お待ちください、な
にとぞご迷惑をおかけしまして誠に申し訳ありませんでした！

それではどうぞ。

第一話 天才と何とかは紙一重って言うけど実際は違つと最近気づいた

第一話 天才と何とかは紙一重って言うけど実際は違つと最近気づいた

* + + ? + + *

「うー、ねえみんな何かいいアイデアないの!？」

今日の会長はすこぶる機嫌が悪いようだ。まあ原因は分かりきっている、昨日の第一生徒会からの宣戦布告騒動だ。あれから部屋に戻り、ずっと考えたのに何も浮かばなかった。今日もこうやって集まり、考えているが何も浮かばず仕舞だ。

「まあまあ会長、落ち着きましょう?焦ってもいい考えは浮かびませんよ?」

「わかつてるわよ!あんたも文句言う前に考えなさい!ていうか司、何か情報は入ってこないの?」

「残念ながらまだ何も」

「うっ、ほんとどうすりゃいいの・・・?これじゃ負けちゃうよ・・・」

「・・・」

会長のネガティブ発言のせいでみんなが黙り込んでしまつ。ああ、イヤな空気だ、このままダンマリを決めこ・・・むわけにはいかないか、それじゃあ何の解決にもならないな。よし、初心にかえてみるか。まず今日の議題は「誰でも知っている意外なスポーツ」だったな。よく考えてみりゃこの議題、かなり無茶な議題だなまず意外って時点で数は限られるし、そこにみんな知ってるが加わるともー不可能に近い気がする。気づくの遅せーよ俺!でも第一生徒会に策無しで真つ向勝負は絶対避けたいところだ。うーん、この

際だから裏の裏をかいてありふれたもので勝負つてのもアリかな、たとえばボードゲームとか？俺が思考を巡らせていると由岐がこの沈黙を破り、ある提案を出した。

「ねえサヤ、一つ思いついたんだけどいいかな？」

「え！なににに！？」

「鬼ごっこ、ってどうかな？」

「・・・・・・はあ？」

由岐以外のメンバーたちの口から間の抜けた声が発せられる、もちろん俺の口からも。鬼ごっこってなんだよ、鬼ごっこって。

「あんな由岐、もーちよい具体的に説明しろよ。なにが言いたいのかさっぱりわからんぞ？」

「つまりアレよ、ほらテレビでよくやってるじゃない。芸能人が賞金賭けて逃げ回るヤツ。あんなヤツがいーいんじやなかなーってさ」

「つまりサバイバル鬼ごっこってヤツだね、由岐ちゃん？」

「さっすがざくろ、よくわかってるじゃない」

ああ、アレね。要するに制限時間いっぱい逃げきるってヤツね、確かにそれなら勝敗も分かりやすいし誰も予想なんかしてないだろう。これなら第一生徒会とも戦えるな。

「確かにそれはいい案ね。麻木、どう思う？」

「俺は賛成です、これなら俺たちにも勝機はあると思います。でも由岐、そのサバイバル鬼ごっこに明確なルールってあるのか？」

「ルール、か。たぶん無いわね。」

「じゃあまずそっからだ。会長、今日中にルール考えとくんて明日の放課後、第一生徒会とアポ取っておいってください」

そういつて俺は勢いよく席を立ち、部屋を出る。

「え！ちよつと麻木、どこいくのよ！？」

「帰ります！じゃあまた明日！」

「だからちよつと待たんかい！！」

会長の叫びを無視して俺はダッシュで昇降口へ走るのだった。とにかく今はルールが最優先だ！

＋＋＋　？　＋＋＋

シユウが部屋を飛び出していったおかげで会議はそれから進展することなく終わってしまった。サヤは第一生徒会との話し合いの予定を取り付ける為に玲士郎のところへ行き、残った私、水上　由岐と１年ズは仕方なく帰ることに。とはいえこのまま帰るのもなんなので二人と一緒に近くのマツクへ向かった。

「あの水上先輩、麻木先輩どうしちゃったんですか？あんなに急いで帰るなんて」

「昔っからあなのよ。一つのこと集中し過ぎると周りが見えなくなるってカンジ、まあそれがあいつの長所であって短所なんですよ」

「昔っから、ってどういう意味？」

「あいつとは小・中・高って全部一緒に学校のな。ま、流石にクラスまでは一緒じゃないけど」

ストローで爽健美茶をすすりながらざくろの質問に答える。するとざくろはむくれたように顔を背け、何かモゴモゴとつぶやき黙ってしまった。何か悪いことしたかな、私？少し考えても結局わからなかったので後回しにすることに。

「幼なじみ、ですか。もしかして麻木先輩のこと好きだったりしますか？」

「ええ？何でそうなるの？」

「ほら、古今東西幼なじみが恋人に発展することが多いじゃないですか」

ありえない、と一蹴しハンバーガーの包みを開け、頬張る。だいたいの幼なじみが恋人になるなんて今時流行らないって、そんなことが起きるのは物語の中だけ。それにあいつ彼女いるし、私が入っていい隙間なんて微塵もないはず。

「ねーねー二人とも、そろそろ帰らない？もう六時回っちゃったよ」

「げ、もうそんな時間なの。仕方ないわね、今日はお開きにしましよ」

「そうですね。それじゃ俺こっちなんで、また明日」

「うん、また明日」

「じゃあね」

店を出て司と別れる。それからしばしの間、ざくろと二人きりの帰り道。あたりは薄暗く、ぼつぼつとある街灯がなんとも言えない幻想的な雰囲気を作り出していた。

「ねえ由岐ちゃん、久しぶりだね。こうやって帰るの」

「んー、そうね。中学の時以来だもんね」

そういえばざくろと一緒に帰るのなんて一年ぶりくらい、なんか気恥ずかしいな。ざくろはどう思っているかはわからないけどその会話を最後に私たちは、一言も言葉を交わすこと無く分かれ道まできてしまった。

「じゃあまた明日」

「うん、またね」

トーンの落ちたざくろの声に違和感を覚えたが私はそのまま振り返らずに歩き出す。

「ゆ、由岐ちゃん！」

「ん？なに？」

さつきとは裏腹に少しうわずったようなざくろの声にまた違和感を覚えつつ、振り返った次の瞬間、頭の中は真っ白になった。

「ーーーーー！！」

私の唇に重なるざくろの唇、普段感じない感触に頭の回路はショート寸前。目の前の目を閉じたざくろの顔を見るとさらに恥ずかしくなり赤くなるのが自分でも分かった。あーとにかく落ち着け私！ざくろの唇がふれていたのは時間にして五秒ほどの短い時間だった。私にとってはとっつっても長く感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

陸に打ち上げられた魚よろしく口をパクパクする私。焦りすぎて言

葉が全くでてこない、というか何も考えられない。

「その、せ、宣戦布告だからね！」

「は？」

やっとでてきた一言、違う、一文字。何とか落ち着いてきたみたいね、っーか何よ？宣戦布告って？

「由岐ちゃん是谁にも渡さない！絶対に迎えに行くから！」

「や、だから何言ってるのよあんたは！？」

「じゃあまた明日、ばいばい！」

「せめて理由ぐらい聞かせろってば！」

私の叫びも空しく、ざくろは路地の角へ姿を消してしまった。行ってしまったなら仕方がない、帰るか。ショート寸前の頭でなんとか割り切り、歩き出すと不意にさっきのことが頭をよぎる。突然のキス、しかも女の子同士、で。・・・何思い出してんのよ私は！！あーもう恥ずかしい！とにかく顔が熱い。今すぐこの場を立ち去りたい一心で足早に家路についたのだった。

+ * * ? * * +

その日の放課後、私、皇 沙夜香と第三生徒会の面々は中会議室にいた。もちろん第一生徒会との話し合いのために。といってもルールを知っているのは麻木だけ、会長である私にも教えてもらってない。まああいつのことだから心配する必要はないと思うけどできれば私にくらい教えてくれてもいいと思うんだけどなー。

「すまない、遅れてしまったみたいだね」

「いえ問題ありません。では始めましょうか」

少々遅刻（とはいえ二三分ほどだが）してきた第一生徒会のメンバーたち。参加するのは会長の藤宮先輩と副会長の青山君、書記の一年生の子の三人だけのようだ。

「さて単刀直入に言おう、勝負の内容はなんだい？」

「その説明は俺からさせてもらいます」

そういつて簀巻き状態の模造紙を手にはホワイトボードの前へ移動する麻木。一体どんなモノに仕上がったんだろう？あいつのことだからうまくやってくれたんだろうけど。

「まず勝負内容は学校の敷地すべてを使った制限時間付きの鬼ごっこです。鬼役が第一生徒会、逃げ役が第三生徒会です。」

「ふむ、鬼ごっこか。悪くないな。では詳しく聞かせてくれ」

「はい、ルールは単純で制限時間内に第三生徒会のメンバー全員を捕まえればそちらの勝ち、一人でも逃げできれば俺たちの勝ちです。制限時間は九十分、鬼である第一生徒会は今メンバーを投入して構いません。これは敷地全体を使うということを考慮してのことです。これが大まかなルールです。ただし部屋などに鍵を掛けて立てこもるなどは反則です」

「うわー、これじゃこっちがに不利なルールじゃない。何やってるのよあいつは！六対三十ちよつとじゃどー考えてもこっちが危ないわよ、とりあえず今は黙ってるけどこのまま終わったら絶対グーで殴ってやる。」

「なかなかおもしろそうじゃないか。青山、君はどう思う？」

「いいんじゃないですか。どちらにも平等なルールだと思います」

「それじゃあこれで決まりで良いですか？」

「ああ構わない、時間もあまり無いことだしね」

「では詳細は今日中にそちらにお送りします」

「ありがとうございました、と一礼し麻木は模造紙を抱えて隣の席へ戻ってきた。結局最後まで私たちに不利なルールは変わりないまま終わってしまった。一体何を考えているのやら。それからの話し合いでルール変更は無し、そして勝負の日にちは明後日と決まった。時間にして一時間ほどで話し合いは終わり、私たちは作戦会議のため生徒会室へと向かった。

「さて作戦を聞かせてもらいましょうか副会長？」

「そんな怖いオーラ出さないでくださいよ、ちゃんと作戦ありますから。まず俺が指定した逃げられる範囲、覚えてますよね？」

「ええ、学校の敷地全体よね」

「それが最大の利点です。だって考えてみてください、いくら人数が多い第一生徒会といえど三十人ちよつとでしょ？それだけの人数でこのバカ広い敷地からたった五人を探すんですよ、しかも一時間半以内で。施設の使いようによってはかなり有利に戦えますよ、まあそのためには下見が必須ですから空白の時間を作ったんですよ」正直びつくりだ。端から見れば明らかに不利なルールをこうも逆手に取るとは、学年十番以内は伊達じゃないってわけ、単なるアニメオタクとは違うのね。

「麻木、あんたホントに頭切れるわね。そこは尊敬できるかも」

「いえいえそんなに褒めないでくださいよ、なんか恥ずかしいですね」

なんて口で言っている割には見事などや顔、まったく何というかこいつらしいわね。ん、あれ？今日はツツコミが無いな、いつもだったら由岐が「その顔で言うセリフじゃないでしょ」、とかツツコミはずなのに？

「由岐？」

「・・・・・・」

窓際にたつて夕日色に染まる町並みを眺め、黄昏る由岐。その夕日を浴びた横顔は幻想的で、そしてまるでガラス細工のように繊細で触れたら壊れてしまう、そんな不思議な雰囲気を出していた。正直言つて彼女を見たとき、同姓である私ですらドキッ、ときてしまった。別に私はそっちの気はまったく無いけど何というかほら、そういうのあるじゃない、ああもう、ええい！とにかくそういうのな！あー、話がそれた。ゴホン、まああれだね、なんか考えことしてるみたいで私の言葉は耳に入っていないみたい。

「おい由岐、会長が呼んでるぞ」

「ん、ああ。何か言った？」

「だから会長が呼んでるって」

「ゴメン、完璧聞いてなかった。なに？」

「何か考えごととしてたんでしょ。いつものツツコミが無いからどうしたのかなー、って思ってたさ。じゃあそろそろ解散にしましようか」自由にしてるみんなを集めて明日の連絡をする。明日は勝負に使えるような場所や建物を下見に行くのだ。麻木曰く「なるべく見通しがよく、人が集まるところ」が良いらしい。それをみんなに伝え、今日は解散！

＋＋＋　？　＋＋＋

いつも通りの白い階段を登り、とあるドアの前で足を止める。「水上」と書かれた表札、ここが私の家であり死んだ母が残してくれた数少ない形ある遺産のひとつだった。正確には母が残してくれた莫大な財産を使って借りたモノ、といった方がいい。物心つく前に母は死に、父は私と母の死から逃げるように外国へ単身赴任、おかげで身寄りのない私は小学生のころからここにひとりで住んでいる。別にそのことが不幸で自分がかわいそうだ、とかかっていうことを強調してるつもりもないし、世界が自分だけに冷たいとか卑屈な考えもしてない。それにほかと比べれば私なんかずっとマシな方だ、金があるあたり。ここはこのあたりでは珍しいオートロックのマンションで学校からもそんなに遠くないので今でもここにいただけだ。友人は皆、うらやましがるけど実際はただ静かなだけ、むしろ私は家族と一緒に暮らせる方がうらやましいと思う。ただいま、いつでも帰ってくる言葉はもちろんない。すでにこれは小さい頃からの習慣になってるから意味っていう意味はないんだけどね。自分の部屋にバッグを放り投げ部屋着に着替えて、そのままベッドに横になる。解いた長い髪がクシャクシャになっちゃうから普段はやらないんだけど今日はそれどころじゃなかった。昨日の一件のおかげで今日一日ざくろとはまともに話してない。なんというかあの子の顔を見るとどーしても昨日のことを思い出してしまい、恥ずかしくなってきた。こちなくなっちゃうんだよね。あの子はどうなのかかわからな

いけどいつもほどの元気が無かったみたいだった。要するに昨日の
って告白、だよな……。いきなりのキス↓他の人には渡さ
ない↓迎えに行く……。どう考えても告白以外の
何者でもないよね、これ。そういえばあのとき司がシュウの話題を
持ち出したときからなんか様子ヘンだったような？……。あ
ー！！もうやめやめ、このことは割り切ろう。勢いよく体を起こし、
天井からカーテンの引かれていない窓へ目を移す。

「……………雨」

思わす思っていたことが口にでてしまった。日が落ち、暗くなった
町にしとしと降る雨。天気予報では晴れだったはず、はずれたな。
雨を見た瞬間、私の心の中にあつたモヤモヤがどこかへ消えて少し
軽くなった、かも。雨が流してくれたんだなきつと。そのままカー
テンを閉め、リビングに向かう。もちろん食事のために、ね。いい
加減、割り切ろう。

第一話 天才と何とかは紙一重って言うけど実際は違々と最近気づいた（後書き

次回予告

予想外の雨で外の下見が出来なくなってしまい、ちょっと誤算の第三生徒会。仕方なくいつも通りの活動（駄弁り）をすることに。そんなとき、6月に控えた学園祭についての話が持ち上がった。そこで司の一言があるとある混乱を招くことに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4308s/>

私立星鐘学園第三生徒会奮闘日記

2011年10月8日05時39分発行